

七 子どもの遊びとわらべ歌

子どもたちは身の回りの物を利用して、身近かな仲間と、ときには一人で日々新しい遊びを作りだす。子どもたちは、一人で遊ぶこともあるが、それは集団で遊ぶ前の準備作業のようなもので、多くの場合は集団での遊びが多い。集団で行う遊びにはそれ相応の知恵や体力・リズム感など、さまざまな能力や社会性が必要となってくる。

今日の子どもたちの遊びの伝承と創造は大幅に変化した。物を投げたり合戦をしたりという危険なもの、品物を賭けあう賭博性（とくせうせい）のものなどは禁止され行われなくなった。また、子ども数の減少による子ども集団の希薄化（きはくか）、教育密度が濃くなり学校だけでなく塾や習い事などによる遊び時間の減少、さらにファミリーコンピュータなど、遊びの内容が変わってしまった。今は遊ばれることもなくなった、かつての遊びをいくつか見てみよう。

(一) 男児の遊び

男児の遊びの多くは、勝負をとまなうもので勝敗を争うなかで、社会生活に必要なさまざまなルールを身につけていく。

瓦当て、コマ、縄飛び、パチャ、ゴム銃、紙飛行機、馬乗り、けん馬、水鉄砲、サギヤーアシ（竹馬）、隠れん

ぼ、陣取り、将棋、ゴイナラベ、竹トンボ、ヘンボ取り、トウバタ（凧）、ラムネンタン、カンカン蹴りなど。

1 トウバタあげ

へとうばた あんがれ あんがれ

西風吹け吹け 糸とるでつちよん

足元よろよろ 奴さんのお尻は寒ざらし

七、八月ごろから秋にかけて、コチ風（東）が吹き渡るころ、トウバタ（たこ）をあげて遊ぶ。

竹ひごで骨組みをつくり障子紙を貼り、丈夫な紡績糸をつけ、風に乗せて空へあげて遊ぶ。あげた高さを競うだけでなく、ケンカダコといって、ガラスを割って飯粒を練り糸につけ、相手のタコ糸を切り落とす遊びもあった。

タコの種類は、エーガ、ナガサキ、ブーブー、バラモンなどがある。

2 コマ遊び

ケンコマ（坊主コマ） まず順番を決めるため一斉にコマを投げるときに歌った。

イチワイ、コキワイ、モドシナシ（割れても失くなくても戻さない）

ポーニオーチャ、セーイノ、キンキンモータノ、シヨイ（ポーニヨッテ、モータチャモータチャ、キンキンモッテ、

シヨイ)

ケンゴマというのは、一番負けた者が最初にコマを廻し、次に順番通りにコマを廻すが、次の者は廻っているコマをめがけて、打ちつけて勝負をする。最後まで倒れずに残った者が勝ちとなる。

カケゴマ コマの足に糸を巻きつけて、廻した反動で前後、左右、上下と自由自在に、自分の体も廻りながら廻りこなし、手の平に乗せたり、背中を一巡させたり、廻るコマを袖口に宿らせたりする。ケンゴマと違い、一人で楽しめて危険もなかった。

3 ネンポウ

デンポウともいう。カシの木などの小枝の先を尖らしてネンポウをつくる。ジャンケンをし、負けた者が、田にネンポウを投げてさす。次の者から順に相手のネンポウめがけて、投げてさしていく。自分のネンポウがささって、相手のネンポウを倒したら自分のものになる。

4 ペチャ

ボール紙で作った直径一〇センチほどの円形(丸ペチャ)あるいは四角形のもので、武将や野球選手、相撲取りなどの絵が描いてある。駄菓子屋に売ってあった。庭先や庭中の地面に、出しあったペチャをおき、手に持ったペチャ

を地面に打ち当て、裏返すと勝ちになり自分のものになった。打ちあてるペチャは、風が強くおこるようにとロウを塗ったりして工夫をした。袖を使って風を起こしたりすると、テグロ(八百長)をしたと言い争いになった。

5 サギヤーアシ

竹の棒に横木をつけ、その上に足を乗せ、棒を手で操作して歩くもので、一般的には竹馬という。スツケンギヨウ(片足立ち)をしたり、二本の足をカチャカチャと打合せたりして遊ぶ。また、家の底ひそから乗るような足の高い竹馬もつくった。

6 メジロ捕り

嘉瀬川下流の竹林には、ウグイスやメジロなどの鳥の住処である。竹竿の先にトリモチをつけ、鳴き声をしたり、鳥籠におとりを入れて寄ってきたメジロを捕る。捕ったメジロは、ねり餌をつくって育てた。

7 ドンガメ遊び

瓦のかけらを立てておき、離れたところから、瓦を足の甲や股の間にはさんだり、頭の上に乗せたりして、立

てている瓦のところまで行き、上から落として倒すという遊びである。運ぶ姿がカメにも似ておもしろいことから名付けられたのであろう。

(二) 女児の遊び

女児の遊びには歌を伴うものが多い。歌は遊びや年中行事のなかから自然発生的に生まれたものや、既成の歌が遊びのなかに取り入れられたもので、全国的に流行したものが広く分布している。

お手玉、けんけん、ゴム飛び、かごめかごめ、まりつき、羽根つき、マルダイガッコウ、石蹴り、ままごとなど。

1 まりつき

現在、まりはゴム製であるが、ゴムまりが普及（明治半ばに国産される）するまでは、綿や布などを芯にして、色糸をまいて作った手製のまりでついていた。まりつきは、歌をうたいながらテンポよくつくが、つき方も単純な動作から複雑なものまである。

「あんたがたどこさ」は全国的に広く分布するもので、昭和初期から歌いだされ、第二次世界大戦後に大流行した。句の最後の「さ」と歌う箇所、ついているまりを右足でまたぐ動作を反復し、最後の「チョイとかぶせ」

で、まりをスカートで受ける。

へあんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ

熊本さ 熊本どこさ 船場さ

船場山には たぬきがおつてさ それを猟師が 鉄砲で撃つてさ

煮てさ 焼いてさ 食うてさ それを木の葉で チョイとかぶせ

へからむめ からさげ からこの橋から ぴんと とうで とうられた。

このおてまりや たれにあげましょ 花の○○さんに、ああげましょ

花の○○さんは 右の手元も かなわぬもんなあれど よう受けとんさいの

よう受けとりました。からむめ からさげ

と繰り返す。女の子数人が集まり、合唱しながら、まりをつき、花の○○さん

と、次のつき手にまりを渡すまでの歌である。

へひいふくれたおんみいさん 柳町の弥平さん こんにやあ（今夜）一晚、泊まらんせ

ねまい鯉頭、くわすつけん（食へさせ） そごごとうおう（二〇）

へおしろいのせ、おんさんせ、おおさかおさかどん、やすやどん、すつつかまかせ

かおはるでどん、いくらです、五百です…

と、歌に合わせて右手、左手と交互につく。足も交互にあげては、まりをくぐらせ、

…まあちよいとまからかすつからかね、あんたのことなり負けとこね。ちよよよ。

この「ちよよよ」で両足を開いて、まりを股の下をくぐらせ、両手を背に回してまりを受けとめる。

2 羽根つき歌

へひらひらひらひら こんぼろひらひらひら 三日月さんに ついたなり そごでとうおう

正月になると羽根つきをした。ムクロの木の実にカモのはねなどをつけた手製の羽根で遊んでいた。

3 人あて鬼遊び歌

へお月さんお月さん なぜ星しゃ出さつさん 十五夜さんからにくまれぼーで

そごで星や出さつさん

ないがろ かがろ 池のはーたのこうぶくろ こうぶくろ

うーれーおんもんなだーいしよ(裏(後ろ)におる者は誰しよ。)

女の子たちが、互いに両手を握りあい丸く輪になる。真ん中に鬼役が目をつむっており、廻りの子は歌をうた

いながら輪になって歩き、歌が終わったところで、鬼役が後ろの人の名前をいう。当たれば当たった人が鬼になり、当たらなければ、そのまま鬼役をする。

4 指遊び歌

へいちのけんじょう にけんじょう

さんのけんじょう しけんじょう

しこまのもてえで ものかいといを

十万八方 蜂の巣さいた。

冬の夜など、子どもたちが集まって、手の甲を重ねておき、八番目の者が力をこめて押しつけるので皆が手を引く、引き遅れた者が、次には一番下に手をおくという遊び。

5 縄跳び

女兒の遊び

縄の両端を持った二人が呼吸を合わせて回す。順番を決めて一番目の者が、回転する輪の中にサツと飛び込む。跳び上がってトントン。二番目の人に向かって「おはいんなさい」と呼ぶ。一番目の者は「ハイハイ」と答え、タイミングをはかり跳び込む。二人は、「今日は、じゃんけんばい」とジャンケンをする。負けた方は、「負けま

した。さようなら」と輪からでる。勝者は、「またおいで」といい、次の対戦者を迎える。

6 お手玉

端切れ布を袋状に縫い、その中に小豆やジュズ玉などを入れたもので、これを手で操って遊ぶものである。遊び方は二つに大別できる。一つは、複数のお手玉を順に投げ上げては受け取ることをくり返すもので、上手になると片手で五個くらいまで扱う。

もう一つは、床にくつかのお手玉をまいて、その中の一つをオヤと決め、そのオヤ玉を投げ上げている間に他のお手玉を一定のきまりに従って動かすのである。「お一つ、お二つ、お三つ」などと数をかぞえる。お手玉歌を歌いながら遊ぶ。

へおひとつ下ろして おきょう

おふたつ下ろして おきょう

7 観音講

夏休みなど、長い休みの終わりが近づくと、女の子たちは誰がいうともなく「観音講しゅうか」となる。観音講は、観音菩薩を信仰する講のことであるが、この観音講は、祖母たちが行っている観音講の懇親の場の真似事

で信仰の要素はない。

女の子たちそれぞれが米一升ほどを持ち寄り、それを売って資金をつくり、ケチャップ飯やかしわ飯の材料やお菓子を買い求める。仲間の家を宿にして母親の手伝いをうけて料理をつくり、食べたり歌ったり話したりという一時を過ごす。

8 自然の歌

へおつきさんないくつ 十三、七つ

七つの年から京にのぼせて 学問させて

七どん 八どん 源八どん 源八どんが負けやった。

これは、夏の月の晩に女の子たちが集って歌っていた。

(三) 動物の歌

1 きゃあつぐろの歌

へきゃあつぐろ きゃあつぐろ

きやあつぐろの頭みや 火のちいた
ぶるつとすんで きやあ消えたー

秋から冬にかけて、どこの堀にもきやあつぐろが住んでいた。きやあつぐろは、かいつぶり(古名鳩にき)という水鳥のことで、動作がすばやく人を見るとすぐに水にもぐってしまふ。その様子が頭に火がついてあわててもぐるように見えたのであろう。

2 かつぶいじよ

へ(こ)つぶらじよ こつぶらじよ

花のテングー(手拭い) くりゆうか(与えようか) くりゆうか

一尺とつかん(取るか) 二尺とつかん 三尺までくりゆうだん。

夏の夕暮になると、蚊を求めてコウモリがでてくる。屋根裏などをねぐらにしたコウモリは、かど(庭)に低く高く飛び交うのを、子どもたちは笹竹の先に紅色の細長い布を結びつけ、それを振り回してコウモリを捕らえる遊びをする。

3 蛭じ

へほおつ ほつ ほおたるこい

ほつ ほつ ほおたるこい

あつちの水は ながあいぞ こおちの水は ああまいぞ

蛭を呼びよせようと、笹などを持って蛭を追っかけながら歌った。

4 からす勘三郎

へからす からす 勘三郎

わが家のえのちやあ つん燃える

はよう行つて 水かけろ

からすが宿え火のちいた

一本橋しやあ つん燃える

はよう行つて 水かけろ

子どもたちが遊び疲れて、家路に帰るときなどに歌った。

おわりに

民俗編執筆のために、各集落を調査のために訪れるようになって、あつという間に三年余りが過ぎた。できるだけ行事も見せていただきたいと歩いたつもりであるが、すべての集落を訪れることはできなかった。それだけに、記述において濃淡があることはゆがめなく申し訳なく思う。

民俗というのは過去のことには過ぎないと思われるかも知れないが、私たちの先輩が連綿と続けてきた行事やしきたりにはそれなりの意味があったのである。たった一日しか奉納しないのに、何日も練習をした浮立、何故これほどしなければいけないのだろうかと疑問を持った人も多かったと思う。現在、私たちの生活は快適でたいへん便利になった。今後さらに合理化は進みますます暮らしは向上するであろう。しかし、地域には引き継いでいかねばならない民俗があるということも忘れて欲しい。

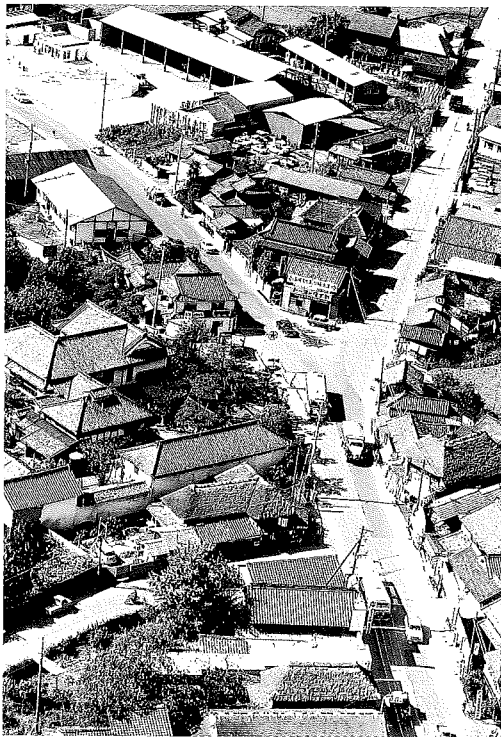
最後にアンケートをはじめ、貴重な資料をご提供いただいた方々のお名前を一々あげることができないが、改めて感謝を申しあげる。

参考文献

久保田町史 昭和四十六年十月 久保田町史編さん委員会

日本石仏事典 昭和五十年十二月 庚申懇話会

人生儀礼事典 二〇〇〇年四月 (株)小学館



昭和40年頃の徳万交差点

ふるさと探訪・思い出の記